スーパービクセン・トラブル・ツアー　6

二日後。東京。

若菜と亜紀は、不安な表情で、目の前の貸しビルを見上げていた。こぢんまりとした五階建てのビルだった。一階につき事務所が一つずつ入っている。

黒川興業は三階にあった。暴力団・黒川組である。かつて優美と江梨は、黒川組組長の睾丸を蹴り潰し、東京にいられなくなった。組員たちは江梨の弟を誘拐し、身代金を要求してきた。優美と江梨は今頃、引き渡し場所に向かっているはずだった。

江梨から事情を聞いた若菜と亜紀は、協力できることはないか、と申し出た。あっさりと時価十数億円のダイヤを譲った彼女たちに恩返しがしたかった。だが、優美と江梨も笑って、危険なことに巻き込めない、と拒絶した。自分たちだけでおとしまえをつける、と東京駅で別れた。

だが、ヤクザがおとなしく、一億円と引換えに弟を引き渡すとは思えない。なにか裏があるに違いない。二人には内緒で探ってみよう。亜紀と若菜はそう言い合い、黒川組の事務所を突き止めたのだ。

「いこう」

若菜の膝がかすかに震えていた。そんな自分を励ますように亜紀に言った。亜紀は無言で頷いた。

「お待たせいたしましたあ」
いきなりドアが開いた。事務所は、仕切りで二部屋に別れていた。ドアを開けたところには小さなテーブルが一つ置いてあるだけで、チンピラが一人、受付のようなかっこうで何やら書類を眺めていた。
チンピラは、いきなり入ってきた二人のグラマラスな少女に目を見張った。二人は、ピンクの縦縞のミニスカート、ピザ屋の店員のようだった。胸が大きく開き、豊かな乳房の谷間がくっきりと見えていた。
「ご注文の品ですけど」
「頼んでねえぞ」
チンピラは立ち上がった。その瞬間、亜紀がいきなり股間を蹴りあげた。チンピラは眼を見開いてうめいた。亜紀は、その後頭部に手刀を打ち込んだ。チンピラは床にくずおれた。
「どうした？」
仕切りのドアが開き、もう一人のヤクザが現れた。ヤクザが事態を把握するよりも早く、若菜が飛び掛かった。股間を蹴りあげ、体を折り曲げたところを顔面にもう一度膝蹴り。ヤクザは鼻から血を噴いて気絶した。
亜紀と若菜は、それぞれが倒したヤクザの股間を踏みつけ、睾丸を押し潰した。鞄から二本の

野球バットを取り出し、仕切りのドアから内部に入った。

「なんだ、てめえら！」
室内には三人のヤクザがいた。彼らが立ち上がるより早く、亜紀と若菜は二人のヤクザにバットを振り下ろした。二人は脳天に打撃を受け昏倒した。
だが、残る一人は手ごわかった。スキンヘッドの大男だった。バットを振りかざして突進した亜紀は撥ね飛ばされ、壁に叩きつけられた。若菜は背後から襲いかかったが、バットは空を切った。振り向いたヤクザは、若菜の頬を殴り飛ばした。若菜は尻餅をついて倒れた。大男はその腕をつかみ、亜紀のすぐそばに突き飛ばした。
大男は懐からナイフを取り出した。亜紀と若菜は壁際にうずくまり、震えながら大男を見上げた。大男はにやりと顔を歪めた。獲物は、巨乳の美少女だった。もはや戦意を喪失しているようだった。二人をどう料理するか、想像して楽しんでいるようだった。大男は不注意だった。右手に握ったナイフの刃を左手の掌に軽く叩きつけながら、近づいてきた。射程距離に入った。
亜紀も若菜も、偶然同じことを考えていた。そして、偶然、アクションが一致した。二人は同時に、思い切り脚を突き出した。亜紀の踵が左側の睾丸に、若菜の踵は右側の睾丸にそれぞれ命中した。大男は目を剥き、口を開いた。
二人は素早く行動した。立ち上がった亜紀は、もう一度、大男の睾丸に足の甲を叩きつけた。

大男が呻き、股間を両手で抑えるよりも早く、背後に回った若菜が男の睾丸を蹴りあげた。男は悲鳴をあげ、床に膝をついた。亜紀が、人差し指と中指を男の両眼に突きたてた。大男は絶叫した。若菜がバットを拾い上げ、男の脳天に撃ち下ろした。スキンヘッドの頭から血が噴き出し、男はばったりと仰向けに倒れた。若菜はさらに、大きく開かれた股間にバットを打ち込んだ。みるみる大男の股間が鮮血に染まった。

一人のヤクザが、頭を片手で抑えて起き上がっていた。何が起こったのか理解できていないようだった。若菜は、そのヤクザの胸ぐらをつかんで立たせた。

「ひっ！」

気の弱そうなチンピラは、無残に床に倒れて血を流している大男の姿を見て、小さく悲鳴をあげた。亜紀がナイフを拾い、チンピラの喉元に突きつけた。

「正直に白状しな」

「な、なにをだ……」

「あんたらが誘拐した、慎司という子のことさ」

「嘘ついちゃだめだよ」

若菜はサディスティックな笑みを浮かべ、いきなり男の睾丸を鷲掴みにした。男がひっと呻き、苦しげに身を捩った。

「嘘、ついたら……」

若菜は微笑み、睾丸を強くひねりあげた。男は悲鳴をあげた。

「潰すよ」

「わ、わかった……話すから……玉を、玉を潰さないでくれ」

男は涙を流しながら懇願した。若菜は少し手を緩めた。

「一時間後に……芝の倉庫で取り引きをやる……相手の女は二人。こっちも二人だ。江木と宮村の兄貴が言っている」

「ほんとに二人だけなの？」

「ふ、二人だけだ」

「嘘つくと……」

若菜がまたも睾丸を強くひねりあげた。チンピラは絶叫し、涙を流しながら必死でわめいた。

「わ、わかった。あと二人、チャカ持った奴が……」

「チャカ？」

亜紀が眉を顰めた。

「そんなもの持って何するの？」

「ふ、二人は……組長の玉を潰した。こいつらを生かしといたら組の面子は丸潰れだ……だから、殺してしまえって……」

「じゃ、慎司は？」

「奥の小部屋にいる。取り引き場所には、偽者がいっている」
「場所はどこ？」
「晴海の第四埠頭だ……。黒川って白ペンキで書いた古い倉庫がある。そこで……」
「急がないと」
亜紀は若菜を促した。若菜は頷いた。チンピラは叫んだ。
「全部話したんだ。もういいだろ。手をはなせ」
「どうする？　亜紀」
若菜子はにやりと笑った。
「このままはなしてやっていい？」
「潰しちゃいな」
亜紀はあっけらかんと言った。チンピラが悲鳴をあげるよりも早く、若菜は力をこめて二つの睾丸をひねり潰した。
もう一人のチンピラは昏倒したままだった。亜紀は「こいつも潰しておこう。追ってこられちゃまずいからね」と呟き、男のズボンを脱がせ、睾丸を握った。男は痛みに意識を回復した。
「な、なんだ！」
男はわめいた。
「静かにして」

亜紀は微笑み、そのまま握り潰した。

晴海の第四埠頭。
木造の古い倉庫だった。埃をかぶった段ボール箱がいくつか積んであるほか、何も置いていなかった。窓は二つあったが、ガラスは半分ほどしか残っておらず、新聞紙や板でふさいでいる。
優美と江梨は、決められた時間の三十分前に現地に到着した。念入りに、付近を調べた。相手は二人で来ると約束していたが、信じていたわけではない。組長が、十代の少女二人に不能にされ、廃人同然となっている事実は、黒川組にとって耐えられない恥辱だった。面子を回復するためにも、優美と江梨を放っておくわけにはいかないだろう。
だが、とりあえずいまは慎司を助けることが先決だ。
優美は東京に戻るとまず、知り合いの宝石鑑定士を訪ねた。江梨が持ちかえったダイヤは時価一億三千万円の値が保証された。鑑定書と宝石は、江梨が身につけて持ってきた。
「お、もうお揃いか」
ドアが開いた。黒川組の江木と宮村だった。江木は角刈りに肩幅の広い四十男。代貸しクラスである。宮村は痩せて陰気な三十男。宮村は、両手を後ろ手に縛られた少年を連れていた。帽子にサングラス、マスクをしていて表情は分からないが、体つきは慎司にそっくりだった。江梨は思わず足を踏み出そうとして優美に制止された。

宮村と江木は、スーツを開いて、武器を持っていないことを示した。四人は、三メートルほど離れて対峙した。
「ちゃんと連れてきたぜ」
宮村が言った。
「そっちのブツはちゃんと持ってきたんだろうな」
江梨は、懐から宝石の袋と鑑定書を取り出し、大きく掲げた。宮村は頷いた。
「よし、こっちに投げてよこせ。本物だと確認したら、こいつはそっちに渡す」
「そうはいかないね」
優美が言った。
「まず、そいつがほんとに慎司かどうか、顔を見せてもらおうじゃないか」
「それはいいけどよ」
宮村はげたげた笑った。
「ちょいとばかり抵抗したもんでな。顔中傷だらけだ。それでよけりゃ、見せてやる」
宮村が合図した。江木は、少年の帽子とサングラス、マスクを外した。顔中、眼の部分をのぞいて包帯がぐるぐるに巻いてあった。
「どう?」
優美が囁いた。江梨は困惑していた。

「あれじゃわかんない……似てるといえば似てるけど……」
実を言うと、江梨は家出してから三年間、慎司には会っていない。成長期の少年の体型など日々変化する。
宮村が怒鳴った。
「ちゃんと見せたぞ。そっちのブツを寄越せ」
「わかった。一個だけね。それと鑑定書」
優美が言い、袋からダイヤを一粒取り出し、鑑定書とともに宮村の足元に投げた。

倉庫の外には、二人のヒットマンが待機していた。
彼らは拳銃を懐に忍ばせ、窓を塞ぐ新聞紙の破れ目から内部を伺っていた。宮村の合図とともに、倉庫に入り、二人の少女たちを威嚇する。それが彼らに与えられた指名だった。
二人は、ひたすら宮村に集中していた。彼らの背後から忍び寄ってくるものに気づかなかった。
「うっ」
二人が喉の奥で呻くのは同時だった。
若菜と亜紀が背後から二人の股間を蹴りあげたのだ。
股間を両手で抑えてうずくまった二人の脳天に、若菜と亜紀はバットをふりおろした。二人のヒットマンは頭を割られ、血を流して意識を失った。

宮村はそれを拾い上げた。鑑定書を読み、ダイヤをいじくりまわした。
「本物のようだな……」
確信があるわけではなかった。
「分かるの？」
優美がせせら笑った。
「ちゃんと鑑定士に見てもらったほうがいいんじゃない？」
「なに」
「イミテーションだったら元も子もないでしょ。こちらとしても、そいつが慎司君かどうか確認できない段階で、ダイヤを渡すわけにはいかないもの。ちゃんと傷が治ってから、改めて引き渡すってことでどうかしら」
「そうはいかねえな」
宮村はにやりと笑った。
「悪いが、拳銃を持ったヒットマンが外でお前らに照準を合わせてる」
宮村の予想と違い、少女たちの表情に動揺は見られなかった。だが、彼らを睨む視線が厳しくなっていた。
「射殺されたくなかったら、他のダイヤのありかを白状しろ」

「知らない」
優美が答えた。
「私たちが持っているのはこれだけよ。あとは、他の女の子たちにあげちゃった」
「そいつらはどこにいる？」
「知らない。現地で別れたもの」
「名前は？」
「聞いてない」
「嘘をつくんじゃねえ！」
宮村は進み出て、優美の頬を張り飛ばした。優美はあやうく倒れそうになったが、ようやく踏み堪え、ぺっと宮村の顔に唾をはきかけた。
「てめえ……」
宮村は呻き、さっと右手をあげた。
「かまわねえ。こいつら撃ち殺せ！」
「あいよー」
宮村と江木は思わず声のほうを向いた。ドアが開いた。拳銃を構えた二人の少女が入ってきた。若菜と亜紀だった。

「て、てめえら、誰だ？」
宮村は呻いた。
「正義の味方でーす」
若菜がのんびりした口調で答えた。
「来るなっていったのに……」
優美が呆れて呟いた。亜紀が怒鳴った。
「江梨さん。そいつ、慎司君じゃないよ」
「え」
「偽物さ。本物は私たちが保護してる。もう大丈夫よ」
「どういうこと？」
「さっき、黒川組の事務所に伺ったの。慎司君、そこにいた」
亜紀が自慢げにいった。若菜が宮村に向かって言った。
「組の人たち、私たちみたいなかよわい女の子に乱暴しようとしたの。男の風上にも置けない連中だから、男を廃業させちゃった」
「な、なんだと……」
宮村が言った。若菜は冷たく笑って言った。
「全員、玉潰してやったんだよ。倉庫の外の、二人のヒットマンも同様にね」

江木の傍らにいた少年が、突然悲鳴をあげて走り出した。
「止まれ、撃つぞ！」
亜紀が怒鳴ったが、少年は窓にかじりつき、遮二無二外に出ようとした。亜紀は引き金を弾くのを躊躇ったが、江梨が少年に飛び掛かった。少年をひきずりおろし、顔の包帯をとった。似ても似つかぬ若者だった。少年は必死で言い訳をした。
「お、俺……、ただ、こ、こいつらに頼まれて……」
江梨は許さなかった。少年の股間を膝で蹴りあげた。脚の長い江梨に蹴りあげられ、少年の体が宙に浮いた。落下してくるところを、続けざまに蹴りあげた。さらに二度、蹴った。少年は血反吐をはき、白眼を剥いてくずおれた。
「さあて……こいつら、どうします。姉貴」
若菜と亜紀は、両手をあげた宮村と江木に拳銃をつきつけながら、言った。
「玉、潰してやる？」
「それだけじゃ物足りない。こいつらのペニスと睾丸を切り取って、食わしてやりたい。男として最低の罰を与えてやる」
江梨が怒りを満面に現して答えた。宮村と江木は青ざめて顔をあわせた。江木は俯いていたが、ふと顔をあげ、若菜と亜紀を見、初めて口を開いた。
「お前ら、拳銃撃てるのか？」

「え」
亜紀と若菜は不意をつかれ、困惑した表情を浮かべた。その隙を江木は見逃さなかった。奇声を張り上げ、亜紀の手首を蹴りあげた。亜紀は思わず拳銃を取り落とした。宮村が若菜に飛び掛かった。若菜は押し倒された。手から滑り落ちた拳銃が床を転がっていった。
二人のヤクザは拳銃を拾い上げようとした。だが、それより早く、江梨が江木に、優美が宮村に飛び掛かった。
江梨は江木の首に腕を巻き付けて締め上げようとした。江木は江梨のみぞおちにひじ鉄を食わせた。江梨が怯んだ。江木はくるりと振り向き、江梨の顔面にパンチを浴びせた。江梨は危うくパンチをかわした。江木はバランスを崩しかけた。
江梨はすかさず、江木の股間を蹴りあげた。江木は白目を剥いて前屈みになった。江梨は鼻柱に裏手を浴びせた。江木は鼻孔から血を噴き出して、仰向けに倒れた。江梨はその股間をしたたかに蹴りつけた。江木は悲鳴をあげ、両手で股間を抑えて体を折りまげた。江梨は今度はがら空きになった顔面を蹴った。江木の前歯が飛び散った。
一方、宮村は、優美の回し蹴りを食らって壁に叩きつけられた。優美は股間を蹴ってダメージを与え、それから脇腹や鼻柱、みぞおち、ありとあらゆる急所に打撃を浴びせた。宮村はぐったりと動かなくなった。
「どう？」

若菜と亜紀が誇らしげに近寄ってきた。
「多少は役に立ったでしょ」

一時間後。
四人の少女たちは、自分のペニスを口に詰め込まれ、半死半生となって断末魔の激痛に苛まれ悶絶する五人の男たちを倉庫に放置して、外に出た。
「さあてと。ここは一つ、ほとぼりを覚まさないとね」
優美が伸びをしながら言った。亜紀が訪ねた。
「どこかゆくの？」
「そうだね。今度は南のほうでもいこうかな」
「あのさ……」
若菜が遠慮がちに訊ねた。
「私たちも……ついて行っていい？」
亜紀も懇願するように優美を見つめた。優美は少し考え、江梨を見た。江梨は、連れていってあげなよ、と言うように微笑んだ。優美は訊ねた。
「江梨はどうするの？」
「とりあえず慎司を実家まで送っていく。それから後は……考えてない」

「じゃ、私たちだけで南のほうに行くから、あとで追ってきて」
私たち、の言葉に亜紀と若菜が顔を輝かせた。優美は「じゃな」と江梨に手を振り歩き出した。
亜紀と若菜が慌てて追ってきた。
「ね、南ってどこに行くの？」
「とりあえず、車を手に入れて、南に走らせるだけさ」
「車を買うの？」
「まさか」
若菜と亜紀は顔を見合わせた。若菜がおずおずと訊ねた。
「また、誰かの玉を潰して、車を奪うわけ？」
優美は微笑み、頷いた。亜紀が言った。
「そんなことしなくたって。ダイヤはこんなにあるんだし……」
優美は微笑んだ。
「私について来たかったら、私の流儀を受け入れるのね」

かくして、三日後に合流した江梨を加え、四人の巨乳少女たちは、男たちを不能にしつつ、南へと向かっていった。